

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 9 月 29 日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370740

研究課題名(和文)日・英語の話題展開の手法：円滑な英会話のための社会言語能力の育成に向けて

研究課題名(英文)Topic-development style in Japanese and English Conversations: Exploring sociolinguistic competence of English learners in Japan

研究代表者

大谷 麻美(Otani, Mami)

京都女子大学・文学部・准教授

研究者番号：60435930

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語と英語の初対面会話において、聞き手の話題展開の方法に相違があることを明らかにした。日本語では、聞き手は話し手の話題に踏み込まないのに対し、英語では頻繁な情報要求やSecond Storyの提示で話題に積極的に関与しようとしていた。その結果、両言語の話題展開のスタイル、深さ、自己開示の大きさ、情報要求の仕方などの相違をもたらしていた。そしてその背後には、両言語話者が考える望ましい会話、ひいては望ましい対人関係の考え方に相違があることを指摘できた。英語教育では、この点を明示的に教授し、英語で求められる社会言語能力を育成することが肝要であると提言した。

研究成果の概要(英文)：In this study, we distinguished the role of listeners in both Japanese and English conversations. In Japanese conversations, listeners avoid getting involved in the speaker's topic and maintain their distance. In contrast, English speakers are eager to request information on the topic and offer Second Story (Sacks, 1992). This contrastive attitude by listeners also leads to differences in the style of topic-development, depth of topic, degree of self-disclosure, and strategies for requesting information. Moreover, the contrastive communication styles between the languages derive from perceived differences about good conversation and preferred interpersonal relationships. In order to improve the communication skills of English learners in Japan, we argue that it is essential to teach these differences explicitly and develop their sociocultural competence in addition to their linguistic competence.

研究分野：社会言語学

キーワード：英語 日本語 話題展開 情報要求 英語教育 社会言語能力

1. 研究開始当初の背景

多くの日本人は英語の言語知識があるにもかかわらず、実際の英語運用能力は十分ではないという指摘が、多くの経験、また研究から (e.g. 寺内他 2008) しばしばなされてきた。特に、日本人は話さない、おとなしいといわれ、それが日本人への誤解にもつながっているとの研究もある (e.g. FitzGerald 2003)。我々は、それは日本人の消極的な性格に起因するだけではなく、日本語と英語の会話のスタイルや運用方法の相違によるものではないかと考えた。つまり、英語の言語知識だけではなく、日本語とは異なる英語の社会言語能力が十分に育成されていないために話すことが困難となるのではないかと予測した。そこで、日本語と英語の会話スタイルの特徴を明らかにし、英語の会話に円滑に参加できるだけの社会言語能力を育成するためには何が必要であるのかを解明したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、日本人が英語で会話を行う際に求められる社会言語能力の一端を明らかにすることを目的とした。特に、会話に積極的に参加できるようにするために、会話の中で話題を膨らませる「話題展開部」に着目した。具体的なリサーチクエスションは以下の4点である。

- (1) 日本語と英語の会話における話題展開部で、両言語話者がどのように話題を膨らませ (= 話題の展開) 会話の継続に貢献するのか。また、そこに両言語間でどのような相違がみられるのか。
- (2) その背後に存在する対人関係に関する価値観を明らかにする。
- (3) 日本人が英語会話に参加し、円滑に話題を継続させるためには、日本語のどのような話題展開方法や対人関係意識が障壁となっているのかを検証する。
- (4) 上記の結果に基づき、日本の英語教育で、どのような社会言語能力を特に育成する必要があるのかを考察する。

3. 研究の方法

本研究以前から収集していた会話データに加えて、本研究中に追加で収集した会話データを合わせ、談話分析の手法で会話の分析を行った。データは、以下の4種である。

- (1) 日本語母語話者による日本語会話
- (2) 英、米、豪の英語母語話者による英語会話
- (3) 英語母語話者と日本語母語話者間での英語会話
- (4) 英語母語話者と日本語母語話者間での日本語会話

会話参加者はいずれも男性とした。これは男性の会話特徴を取り立てて検証したいからではなく、参加者の変数を統一するためである。また、その属性はいずれも大学卒業以

上の学歴の者とした。会話の場面設定は、初対面の自由会話で、3人を1グループとし、各グループ30分間の会話を収録した。

データ(1)と(2)の比較により、それぞれの言語での話題展開のスタイルや特徴を解明した。さらに、(3)(4)のデータ分析結果を(1)(2)の特徴と比較することで、学習言語において話題の展開がどのように行われるのかを明らかにした。さらに、各会話後のフォローアップ・インタビューも収集、分析し、その結果から、各言語話者の話題展開に対する認識を解明した。

4. 研究成果

(1) 話題の長さ

本研究では、話題の展開を、Brown and Yule (1983)の speaking topically の概念に基づき「話題の関連性を保ちながら会話を継続させる行為」と定義した。そして、話題の関連性が保たれている話題のひとつまとまりを Topic Framework(以下 TF)とし、データ中の会話の TF の切れ目を明らかにした。

そのうえで、30分の長さの会話を、各言語5本ずつ(合計20本、600分)分析、比較すると、以下のように1会話での TF 数が日本語と英語では大きく異なることが明らかとなった。

言語	TF 数
日本語	12
米英語	5.8
英英語	3.8
豪英語	4

Table 1 各言語 30 分会話中の平均 TF 数

同じ 30 分会話の中で、英語に比較して日本語の TF 数が多いということは、日本語では各 TF が英語以上に短いということを意味する。つまり日本語の会話では、英語以上に話題が細切れに途切れるのに対し、英語では1つの話題が日本語以上に長く継続されていると言える。

(2) 話題展開のスタイル

そこで、さらに各 TF の中で会話参加者がどのようにインタラクションをしているのかを質的に分析すると、少なくとも以下の3つのスタイルが特徴的にみられた。

Interactive Style: これは、話し手が聞き手に多くの情報要求を行いながら話題が展開するスタイルである。聞き手は、先行する話題との関連性を保ちつつ、少しずつ話題の焦点をずらしながら情報要求することで、話題が関連性を保ちながら展開するスタイルである。

Duet Style: これは、それまで聞き手であった参加者が、先行する話し手の話題と類似の Second Story(Sacks, 1992)を提示することで話題が展開するスタイルである。そのため話し手それぞれは、順

に関連ある自分のストーリーを語ることになる。

Monologue Style: 話し手と聞き手の役割が明確に分かれ、話し手は自ら話題を展開し、聞き手はあいづちや短いコメントなどで話題の展開を促すスタイルである。

これらのスタイルの中で、英語は圧倒的にこのスタイルが多く、このスタイルはほとんど見られなかった。一方、日本語ではこのスタイルとおもにこのスタイルも多く見られた。

以上から、話題の展開は、話し手以上に聞き手の関与の仕方が大きな要因を握り、話題展開のスタイルを決定しているといえる。つまり聞き手が情報要求を多く行うとこのスタイルになり、Second Story を語るとこのスタイルになり、聞き手に徹してあいづちなどを打つだけだとこのスタイルになる。そして日本語ではこのスタイルが多く、英語に比較し、聞き手が積極的に話題展開に貢献しないために、TF が短く話題が細切れになるのである。

### (3) 話題の展開、および自己開示の深さ

さらに会話の内容を質的に分析すると、これらの両言語の聞き手の行動の違いが、単にスタイルの相違だけではなく、話題や自己開示の深さにも影響していることが明らかとなった。聞き手の行動をさらに詳細に見ていくと、英語の会話では、あいづちやコメントを述べることはもちろん、過去の会話の発話を再現する「声の引用」ストラテジーを用いて語りを共同で構築していることが明らかとなった。このストラテジーは、「語りが起こっている今この世界」と、語りの中の「出来事が起こったあの時あそこの世界」の二つの領域を行き来することで、意味を多層的に構築していると言える。

また、英語では先の話し手に続いて、聞き手による Second Story も多くみられ、これにより聞き手側も自己開示を行っている場合が多くあった。

これらの聞き手行動の結果、英語の会話では、話題は日本語のそれ以上に様々な方面に広がり、また自己開示も深く大きく行われることとなっていた。

### (4) 聞き手の情報要求行動

(1)では、質問などで情報要求することが、話題展開において聞き手行動の重要な役割を担っていることを指摘した。また、英語会話では、話し手の話題展開と自己開示に聞き手の情報要求行動が強く関連しているものの、日本語の会話では聞き手の関与があまりないことも明らかになった。そこで会話後のフォローアップ・インタビューから、情報要求に対する両言語話者の意識を分析した。その結果、英語話者の中には情報要求を好ましい行動と考える者が多いのに対し、日本語話者には、情報要求を好ましく

ないと考える傾向が見られた。また、初対面会話では質問をしないようにすると回答した者、あるいは質問される会話は好ましくはないと答えた者もいた。つまり、英語話者と日本語話者は情報要求にはかなり異なる価値観を持っていると考えられる。

そのため日本語会話で情報要求を行う場合は、英語以上に言いさし発話、前置きなどを多用し、攻撃的な態度で情報要求を行っているわけではないことを入念に示していることが明らかとなった。

### (5) 結果

以上の分析より以下の点を明らかにすることができた。両言語とも、聞き手が話題の展開に関与をしている点は共通であった。ただ、英語の聞き手は、先行する話題の焦点をずらしながら情報要求したり、Second Story を語ったりすることで話題の展開に積極的に関与していた。それに対し日本語会話の聞き手は、あいづちやコメントなどで話し手の発話を促すものの、話題の展開そのものは話し手自身にゆだねる傾向がある。このような聞き手行動の結果、英語では話題は掘り下げられ、また自己開示も大きくなり、会話はインタラクティブに進み、一つの話題が長くなる傾向がある。それに対し日本語では、話題は英語に比べると深く掘り下げられることが少なく、自己開示も少なく、話し手が一人で話すモノローグ的会話になり、一つの話題が短くなる傾向がある。その背後には、聞き手からの情報の要求に対する意識の違いがあり、日本語話者は相手への情報要求は好ましくないと考える傾向が強く、その結果、もし情報要求を行うとしても、長い前置きや間接的な表現を用いた情報要求を行うことが明らかとなった。

### (6) 考察

両言語の初対面の会話を比較すると、英語は日本語以上に聞き手の関与が大きく、聞き手が使う関与ストラテジーも多様で、それが話題が深く且つ多方向に展開する会話を生み出す一要因となっていると考えられる。一方日本語では、聞き手も話題の展開に関与するものの、その際のストラテジーはあいづちや短いコメントなどによるものが主となり、英語と比較すると話題は話し手主導で展開されると言えよう。日本語の聞き手は、話し手の話題には立ち入ることはせず、話し手の話題を促す聞き役に徹した関与を行っている。このようなスタイルの背後には、相手との距離を縮めようとする英語話者と、英語話者以上に相手との距離を保とうとする日本語話者の対人関係意識の相違が表れている。そしてこの相違が、日本人英語学習者にとって英語会話への参加を難しくさせている要因の一つだと考えることができよう。英語教育においては、単なる英語表現や会話ストラテジーだけではなく、このような背後

の対人意識の相違を明示的に教えることが、話題の展開のみならず、様々な場面で適切に英語で対応できる話者を育成するうえで不可欠と言える。

今後は、今回の研究では詳細にまで踏み込めなかった学習者の会話スタイルの分析を行うことで、日本人の困難点をより明確にする必要がある。そしてこれらの成果を英語教育に具体的に生かす道筋（教授法、カリキュラム、教科書）などを考えていかななくてはならない。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 11 件)

岩田祐子 (2016) 「日・英語会話におけるトピックの発展と聞き手の役割」 *Language Research Bulletin* Vol.30, pp.1-16. (査読有)  
<https://docs.google.com/a/icu.ac.jp/viewer?a=v&pid=sites&srcid=aW5mby5pY3UuYWManB8bHJifGd4OjdkOWFjMjU2M2RiYzA2ZGE>

岩田祐子 (2016) 「初対面会話におけるナラティブの評価：聞き手の評価の日・英語対照研究」 『応用社会学研究』 58 号, pp. 131-144 doi/10.14992/00012026

岩田祐子 (2016) 「日・英語初対面会話に見られる引用ストラテジーと意味の多層性の構築」 『社会言語科学会第 37 回大会発表論文集』 pp.48-51 (査読有)

大谷麻美、岩田祐子、重光由加 (2016) 「話題の展開に寄与する聞き手の役割 - 日・英語初対面会話の対照分析 - 」 『社会言語科学会第 37 回大会発表論文集』 pp.150-153 (査読有)

小沢一仁、江崎ひろみ、重光由加、滝沢利直 (2015) 「大学における教養教育を考える(その 9) - 「現代社会と人」の授業実践の検討を通して」 『東京工芸大学工学部紀要』 38(2), 18-26  
<https://www.t-kougei.ac.jp/research/pdf/vol38-2-03.pdf>

Yuka Shigemitsu (2015) How questions facilitate first-encounter conversations in an intercultural setting: A case study of English and Japanese speakers who have different perspective on questions. *ACADEMIC REPORTS* Fac. Eng. Tokyo Polytech. Univ, Vol. 37 No.2, pp.34-41.  
<https://www.t-kougei.ac.jp/research/pdf/vol38-2-05.pdf>

岩田祐子 (2015) 「ナラティブの協同構築における自己開示 - 英語会話と日本語会話の比較 - 」 『社会言語科学会第 35 回大会発表論文集』 pp.40-43 (査読有)

Yuka Shigemitsu (2014) Offering opinions in tag-like questions in authentic conversation in English and Japanese. *ACADEMIC REPORTS* Fac. Eng. Tokyo Polytech. Univ, Vol. 37 No.2, pp. 32-40.  
<https://www.t-kougei.ac.jp/research/pdf/vol37-2-04.pdf>

小沢一仁、松本里香、植野義明、重光由加、滝沢利直 (2014) 「大学における教養教育を考える(その 8) - 「現代社会と人」の授業実践の検討を通して」 『東京工芸大学工学部紀要』 Vol.37 No.2, pp. 61-70.  
<https://www.t-kougei.ac.jp/research/pdf/vol37-2-07.pdf>

重光由加 (2014) 「初対面会話で求められていること - 日本語母語話者・英語母語話者へのインタビューを比較して」 『立教大学異文化コミュニケーション学部 紀要 ことば・文化・コミュニケーション』 第 7 号 pp. 143-151. (査読有)

重光由加 (2013) Question-answer sequences in English and Japanese conversations: A perspective of conversational style differences. *ACADEMIC REPORTS* Fac. Eng. Tokyo Polytech. Univ. Vol. 36 No.2 pp. 31-39.  
<https://www.t-kougei.ac.jp/research/pdf/vol36-2-05.pdf>

〔学会発表〕(計 23 件) <主たるもの>

大谷麻美、岩田祐子、重光由加 「話題の展開に寄与する聞き手の役割 - 日・英語初対面会話の対照分析 - 」 第 37 回社会言語科学会研究大会 (日本大学) 2016 年 3 月 20 日

岩田祐子 「日・英語初対面会話に見られる引用ストラテジーと意味の多層性の構築」 第 37 回社会言語科学会研究大会 (日本大学) 2016 年 3 月 19 日

Yuko Iwata. English language program in the context of a liberal arts education: Studying academic English and acquiring critical thinking skills” Global Research Network for Liberal Arts Education Workshop “Practicing Liberal Arts Education: Multicultural and Multidisciplinary Approaches. (International Christian University) 2016 年 2 月 26 日

大谷麻美、岩田祐子、重光由加「英語会話に求められる聞き手としての振る舞い 会話データの分析と会話指導へのヒント」大学英語教育学会中部支部定例研究発表会(名城大学) 2016年2月20日

重光由加「会話に対する意識の違いとその表出: 日・英男性の初対面の談話を分析して」場の言語・コミュニケーション研究会(早稲田大学) 2015年12月20日

大谷麻美、岩田祐子、重光由加「英語会話授業での異文化間コミュニケーション能力育成 -異文化の気づきをどのように取り入れるか-」第54回大学英語教育学会(JACET)国際大会(鹿児島大学) 2015年8月31日

Yuko Iwata. Storytelling as social and cultural practice: Self-disclosure in English and Japanese first-encounter conversations. The 15th International Pragmatics Conference (IPrA) (Antwerp, Belgium) 2015年7月31日

Yuka Shigemitsu. How questions facilitate first encounter conversation in an intercultural setting: A case of English speakers and Japanese speakers who have different perspective on question. The 15th International Pragmatics Conference (IPrA) (Antwerp, Belgium) 2015年7月28日

Mami Otani. How do Japanese and English speakers develop a topic in casual conversations?: Roles of hearers in interaction. The 15th International Pragmatics Conference (IPrA) (Antwerp, Belgium) 2015年7月27日

Yuko Iwata. Self-disclosure as a pragmatic indexical in English and Japanese conversations. The AAAL Annual Conference. (Toronto, Canada) 2015年3月22日

岩田祐子「ナラティブの協同構築における自己開示-英語会話と日本語会話の比較-」社会言語科学会第35回大会(東京女子大学) 2015年3月14日

岩田祐子、重光由加、大谷麻美「会話データに基づいて英語コミュニケーション教育を考える - CEFR-Jを視野に入れて -」第53回大学英語教育学会(JACET)国際大会シンポジウム(広島市立大学) 2014年8月29日

Mami Otani. Communication style

transfer of EFL learners: An Analysis of topic-development styles of Japanese English learners. International Association of Applied Linguistics (AILA) 2014 World Congress. (Brisbane, Australia) 2014年8月11日

Yuka Shigemitsu. Comparison of English and Japanese conversation: Offering an opinion in question forms. International Association of Applied Linguistics (AILA) 2014 World Congress. (Brisbane, Australia) 2014年8月11日

Yuka Shigemitsu. The different perspectives for 'a good conversation' between English speakers and Japanese speakers. 20th International Association of Intercultural Communication Studies (IAICS). (Rohde Island USA) 2014年8月2日

Yuka Shigemitsu. Question-answer sequences for the first conversation with new people in an intercultural setting: English and Japanese conversation between English and Japanese speakers. 6th Intercultural and Communication Conference. (Valetta, Malta) 2014年6月1日

Yuka Shigemitsu. A study of construction of an answer part to a question in Q-A sequences in English and Japanese conversation: Where misunderstanding comes from. The 19th International Conference of International Association of Intercultural Communication Studies (IAICS). (Vladivostok, Russia) 2013年10月3日

Tsuda Sanae and Yuka Shigemitsu. Question-answer sequences in English conversation and Japanese conversation: From a perspective of intercultural communication skills. 13th International Pragmatics Conference (IPrA), (New Delhi, India) 2013年2月13日

〔図書〕(計1件)

村田泰美、大谷麻美、津田早苗、岩田祐子、重光由加、大塚容子(2014)『日・英語会話スタイルの対照研究 - 英語コミュニケーション教育への応用 -』ひつじ書房 総ページ数 298

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

取得状況（計0件）

〔その他〕

なし

6.研究組織

(1)研究代表者

大谷 麻美 (OTANI, Mami)

京都女子大学・文学部・准教授

研究者番号：60435930

(2)研究分担者

岩田 祐子 (IWATA, Yuko)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：50147154

重光 由加 (SHIGEMITSU, Yuka)

東京工芸大学・工学部・教授

研究者番号：80178780